

亀山 正邦 編

病態別 脳卒中治療マニュアル

(B 6 判 356 頁 5,768 円 (税込) 1990 年 医学書院 刊)

赫 彰郎

(日本医科大学第 2 内科)

近年、脳卒中の死亡率は急激に減少し、死因別死亡率の第 3 位となった。その減少率も欧米諸国の比較においても際だっており、この面からの訓療に携わる人々にとっては誇るべきことである。しかし、脳卒中の発生率をみると、高齢者においては必ずしも減少しているとは限らず、むしろ横這いの状態である。その原因としては、高齢化社会の到来による高齢人口の増加と CT, MRI, SPECT あるいは PET 等の画像診断機器の進歩により、従来診断不可能であった小病変をも捉えることが可能となったこともある。それだけに、脳卒中の診療に携わる者にとっては、より精度の高い診断、さらに超急性期より慢性期に到るまでの各病期ごとの十分な病態把握と、それに適した治療を選択しなくてはならない。そのことが、今日社会問題化している寝たきり老人、痴呆老人の医学的な面よりの対策につながると考える。

このようなときに、亀山正邦先生の編集による「病態別脳卒中治療マニュアル」が医学書院から発行された。本書は大変手頃な大きさであり、本棚におくより、辞書

のごとく常に机の上におき利用したくなるサイズの本である。編集協力者、執筆者は、脳卒中の診療、研究面の現在最も活躍している人々であり、内科系、外科系の専門家、それに救命救急センターの専門家をも含めた、より実地診療に即した構成となっている。亀山先生の編集にあたっての熱意に敬意を表したい。

脳卒中超急性期の初期診療はその後の患者の運命を大きく左右する。本書では特にこの問題に多くの頁数を割いている。しかも本書では、脳卒中患者の前に立ったときに臨床家がしなくてはならないことを順に追って記載し、重要な診療ポイント、重要な治療法については箇条書に述べられ、しかも理解しやすく囲み欄をつくって強調してある。特に従来にない ICU での処置、管理の項目を入れ、ややもすれば難解になりがちな呼吸、循環管理、輸液・栄養管理を図、表を使用し、実地医家にとりわかりやすく記載されている。

また、本書は図、表、写真を多く使用し、特に脳血管 CT, MRI, PET, SPECT 等は実に鮮明な写真であり、PET, SPECT はカラー

写真を入れ、読者に十分理解していただくという意気込みが見られる。その内容解説はそれぞれの画像診断書に匹敵し、本書ですべて事足りると言っても過言ではない。脳卒中の外科的治療の適応、実施時期については、内科医にとっても熟知しなくてはならない項目である。くも膜下出血、高血圧性脳出血の外科的治療については、従来みられる単なる術式の羅列だけではなく、かなり内容豊富に記載されている。

急性期から慢性期にかけての診療、治療内容も、そのときの病態の解説とともに、予防、治療の項目別に、実際に使用している薬剤(商品名)をあげ、その量、使用方法を丁寧に記載してある。また、リハビリテーションについての解説もシェーマを用いて大変わかりやすい。

このように、本書は超急性期より慢性期に至るまでを病期別に、病態の解説とともにその治療法を各専門家が実際に行っている方法を読者に十分理解していただけるように記載してあるし、読んでいて執筆者の意気込みが伝わってくる。しかも脳卒中に関する現在広く用いられている診断基準、各分類法は、いずれも囲み欄にて記載され、かつ最近のトピックス(遅発性細胞壊死)にも触れている。研修医、実地医家はもちろん、神経内科医、脳外科専門医にとっても是非一読をおすすめしたい書である。